対中国観の分岐点としての太平洋戦争末期：
新聞報道における日中友好

内藤　恵
日本大学国際関係学部国際交流科２年

はじめに

戦時中の新聞を読んでいると、アジアの国々に対する報道が、地域や年代によって大きく異なることに気づく。特に、日本との交流についての報道が１９３９年以降顕著に変化するのが、支那（中国（[1]））である。

支那に関する日本の報道の仕方を概観するに、１９３７年の日中戦争勃発から１９４５年の敗戦までの間に、悪いイメージを持たせるような記事は徐々に減り、友好的な記事が増えてきたように思える。 つまり、中国の戦場における日本軍の状況の悪化に反比例して、日中友好が声高に叫ばれるようになっていった。これは日米戦争における、アメリカの扱い方と正反対である。アメリカに対しては、「鬼畜米英」という言葉があったように、たとえ戦況が日本に不利になっても、けっして日米間の友好は叫ばれなかったからだ。

これは一体なぜなのだろうか。そのひとつには、１９３９年５月から満鉄調査部がはじめた調査結果をまとめた「支那抗戦力調査」（[2]）の影響、ということが考えられる。満鉄調査部は、この総合調査で日本の敗戦の可能性を公に出来ないまでも、蒋介石政権の抗戦力の優位性を明らかにし、各界に激しい論争を巻き起こしていた。すなわち、対中戦争で日本の勝利が見込めなくなったために、中国に対する報道姿勢が変化していったのだろうか。このリサーチペーパーでは、１９３９年頃から１９４５年８月までの“日中友好”についての報道の仕方、特に朝日新聞の記事を中心に注目し、その背景にあった動機、目的、希望などについて考察、分析する。さらに、そうした戦争中の“日中友好”報道が　果

たして日本人の持つ中国観、および、対中戦争観に良い影響を及ぼしたのかどうか、考察する。

Ⅰ．　朝日新聞の記事に表れた日中友好

まず、１９３９年よりも以前の支那に対する朝日新聞の報道の仕方からみていく。

１９３１年９月２３日付の『満州問題早わかり　大事変の遠因と日支諸懸案の解決』と題する記事には、満州を手に入れる経緯などが書かれている。そこには、中国への友好感情はみじんもない。例えば、「鉄道に関する行きがかりと既得の権利によって支那側にその決行を促しているのですが、支那側は少しも誠意ある態度を見せないのです」「朝鮮農民問題は支那側の不法な圧迫によるもの」というように書かれている。すなわち、支那は朝鮮をいじめている悪であり、対する日本はいじめられている朝鮮を助けるヒーローである、と言うイメージを広め、満州占領は道義にかなっていると国民に思い込ませる狙いがあったのではないだろうか。

その後、日中戦争が始まってしばらくしても中国に対する口調は厳しいままであった。例えば、１９３８年１２月２１日付の『悠長な支那農民』という記事では、日活の多摩川スター中田弘二軍曹から撮影所企画部長への戦線だよりが載せられている。その中で彼は、「悠長たる彼等の態度には、何か腹立たしきものを感ぜずには居られません」といっている。（[3]）実際に支那の人々と接した（と思われる）中田が支那人についての悪口を言うことで、より効果的に、日本の読者が中国に対して悪いイメージを持つ働きをしているように思える。また、『日本名の支那娘　支那人はお嫌い』という同年１２月６日付の記事は、子供のない日本人夫婦が 隣に住んでいた少女を気に入り養子として育てたが、彼女は日本化した生活を送るうちに、支那の娘が支那人を嫌いというほどになったという話を伝えている。（[4]）中国人に対して「優しい」日本人の一面を報道する一方で、日本的なしつけを

学び、両方の文化に触れた支那人が、日本の文化を学んでいない一般の支那人を嫌いになったと伝えることで、日本文化の優越性を主張しているようにも思える。

同様に、同年１２月２２日の新聞には『歌う日支の乙女　姑娘留学生初の入京』という記事が記載されている。ここでは「留学生の娘２人は新しい生活への憧れを抑えきれない様子で、覚えたての日本語で東京の美しさを感嘆の声」（をあげた）と報道している。ここでも、日本の素晴らしさを信じきる中国人の姿が伝えられている。しかし、この報道は、見方によっては、日本人は中国人と友人になれると主張しているとも思える。

１９３９年1月７日付の『長江に鳴る女丈夫』という記事には、南京に住んでいる日本人特派員の報告が記載されている。その特派員は、日中関係の良いときに南京に移り住むが、「南京事件」以来中国人の排日熱が強くなって、近所に住んでいた日本人たちはみんな引き上げた中、一人になっても意地でその地に住み続けていたところ　中国人は彼に対して友好的な態度になっていったということが書かれている。（[5]）これは、日本人が「努力」すれば、中国人は親日になりうるということを伝えたいのかもしれない。いずれにしても、こうして「日本人と友人になりうる中国人」の姿が新聞に掲載されるようになっていく。

朝日新聞の報道に限定すると、１９３９年1月３１日付に、（中国の）近代国家への途は日支合作にあり』という記事が掲載されて以来、中国に対して差別的に書かれている記事はほとんど見られないようになる。

１９３９年１１日５日付の『支那の旅から』という記事では、中国に旅行した筆者が「中国の町は美しい。どこの町にも日の丸の旗がひらひらしており、日本軍の兵隊は支那の人々と本当に仲が良く、手をつないでにこにこ歩いているのを見た」と言っている。（[6]）また、１９４１年1月１日には、『支那のお正月』の様子を伝えたり、東亜の子供達が日本語を学ぶ努力をしたり、日本と歩み、協力する様子を報道する記事が載せられている。正月という、人々の気分が盛り上がっている時にあえてそういった記事を載せることで、国

民たちが、よりた易くより強く、中国人が自分たちの仲間という意識を持つことを期待したのだろう。

またこの頃から朝日新聞の紙面に『職場の親善　新支那女性の日誌』というシリーズが、最低でも一週間に一度ずつくらい登場するようになり、そして『日支協力の春』というシリーズは、ほぼ毎日のように写真入りで記載され始めている。

『日支協力の春』という連載記事では、兵隊が川で洗濯していると、中国人の親子が日ごろ保護され厄介をかけたお礼をするのはこの時とばかりに洗濯を手伝ってくれたというエピソードが紹介された。(7) その他も、日本人の指図で一生懸命働いた華人工場員たちが、日本語も理解できるようになり、蒋介石が自分たちをいじめる悪政であるから自分たちは東亜共栄圏の建設のために力を尽くす、という話し、また日本人の指導の下、支那の機関車は華人の手によって新しい魂が叩き込まれていく、といった希望に満ちたエピソードなどが紙面を飾った。(8)

『職場の親善　新支那女性の日誌』においては、顔写真の載った中国人の女性たちが日本人や日本文化に接した感想などを述べている。記事によると、４人の女性は、次のような　心温まるエピソードを共有している。蘇州百貨公司の謝静儀さんにとって　同僚の“加代子さん”は親友である。一度会って加代子さんの笑顔を見ただけで好きになり、加代子さんと接することで自分の性格まで明るくなれた、と言っている。加代子さんは、日支の家の作りの違いを話してくれたときに、中国的な家の作りの欠点を指摘しているのだが、記事によると、彼女はそれに対して反抗的な態度をとらずに前向きに受け止めている。(9)　広東日語学校研究科の馮燕卿さんは、一年間日本語学校に通い、日本人である先生から日本語を学んだ。　彼女は、先生が学生のために日本語を教えるだけでなく、椅子や机を作ってくれたことなどにも感謝しており、日本人と東亜人が姉妹のようになるためには、まず言葉を学ぶことが必要なので、一生懸命日本語を勉強したといっている。(10)　華北交通資業局の候珊さんは、善良な女は門から出ないのが昔からの中国のしきたりで、最

初は女性が働くのは不自然であったが、社会に出始めて日本人の指導のお陰で仕事にも慣れて言葉も通じるようになり、中日人の同僚たちが連絡しあって少しも隔たりなく働いているといっている。(11)　蘇州放送局アナウンサーの姚徳永さんは、同放送局日本語係りの佐野悦子さんと仲良くなって日本語に興味を持ち、佐野さんから日本語や日本文化を学ぶようになった。そして、佐野さんの友だちとも仲良くなり、その友だちから中国人の習慣や伝統について尋ねられ、全て話したという。(12)

これらの特集の記事から分かることは、中国人は日本人に対して友好的だという印象を日本人読者に植え付けようとしていることだ。　しかし、その一方で、日本人が中国文化に興味を持っていると言う最後の姚徳永さんを除いて、中国人は日本人のために尽くす存在で、日本人に対して指導をすることはない、という暗黙の了解をも広めているようにも思える。

日本の敗戦が明らかになってくると、日中間の友好というテーマをさらに大きく越えて、アジアが一つになるべきであるという、より野心的な友好記事が主になってくる。１９４５年に入ると、中国のみを対象とした記事はほとんどなくなる。例えば、４月２４日の『心の扉もはづして沸るアジアの血』と、８月１４日の『アジア民族は一つ』という記事を見てみよう。前者は、大東亜大使会議についての記事で、それには、「晴々とした五大使」（中国・満州・ビルマ・秦・フィリピンの代表を指す）とも書かれている。(13) 今まで“中国”を“支那”と書いていたのに対し、ここでは“中国”と変えられている点が重要である。　ただし、この表現法の普及は、徹底していたようではなく、敗戦前日の『アジア民族は一つ』という記事では未だに“支那”という言葉が使われている点が興味深い。(14)

“支那”という呼び方は中国を見下した言い方で、政府は中国に対して悪いと思い、メディアに対して、書き方を変えるよう指導したのかもしれない。ただし、人々の間には支那という差別的な見方の言葉が残って、そのまま使われていたようにも思える。

Ⅱ．広告に表れた日中交流

ここでは、１９３９年から１９４１年の時期に主に朝日新聞の広告に表れた日中交流の性格をみていく。

１９３９年頃に登場した『歌は戦線へ』と題するポリドールレコードの広告では、日本の歌謡曲は中国の戦線にも伝わり、日本人の兵隊だけでなく、中国人も日本の歌謡曲に興味を持っている様子を、絵入りで描いている。絵入りにすることで、子供にもこういった形の日中交流もある、と伝えようとしていたのであろうか。

左の絵は、１９３９年頃の広告である。これにはまだ大きく支那を見下している面があり、「無敵皇軍と支那軍とは先づその精神が違うのだ」と書かれている。(15) 日本はこの時まだ敗戦というものを味わったことがなく、日清戦争で清を倒した日本にとって、支那は自分たちの相手ではない、精神が違うから　支那は日本のように戦争に勝てないのだ、という印象を国民に与えているように思える。

ところが１９３９年１１月１日には『日満支カメラ・コンクール』など、満州や支那を意識した広告などが徐々に増えてきた。(16) このカメラ・コンクールはこの見出しを読む限りでは日満支人が投稿できそうだが、賞の受賞者の名前を見ると、全て日本人であった。　そして、同じ頃、支那をイメージしたレコードや映画の広告がなかなか大きく宣伝されている。　娯楽については、次のセクションで見ていくので、この章ではあまり詳しくは触れない。

同年２月の『新青年３月号』の広告欄には、「隠れたる支那事情通座談会　支那はよいとこ」という宣伝が、そして同年１１月５日の紙面には『支那人の心を掴む』という本の広告があった。([17]) この『支那人の心を掴む』という広告は、原口統太郎著の「支那人の心理を解剖し、すでに大陸に居る人々またはこれから進出しようとしている人向け」の本のようだ。　その２年後の１９４１年１月５日の朝日新聞広告欄における新潮文庫の広告には『新しき姑娘』と書かれた小説の広告を見つけた。前述したように、１９３９年以降は日中友好が強調されるようになった段階である。支那人と触れ合うこと、支那人との交流を進めることで、今まで差別し続けてきた中国人のイメージを改善しようとしたのか。または、日中交流が進むなかで、新しいタイプの、より望ましい、好ましい中国人が　生まれてくることを期待しようとしたのだろうか。いずれにしても新聞広告の内容にも、時代の流れを感じることが出来るように思える。

また、１９４１年の同じ頃には、NHK ラジオ放送で、「支那現代文講座」が開講された。さらには、支那語学校の広告や、支那語単語本の広告が目立つようになっており、日本において支那語ブームがあったことがわかる。([18])『中日文化交流の回顧と前望』という本の広告欄には「支那人の立場から永久平和樹立の鍵より日支爾国民の反省と文化交流の必要」と問いているほどで、一見、日本にも中国を理解しようとする動きは国民の間にまで浸透していたようにも思える。([19]) しかし、この支那語の単語本を著したのは東京外語大学教授の宮越健太郎であった点には留意するべきであろう。というのも、宮越は現代中国語と古語を混ぜて理解し、そういった間違った中国語を教科書に載せないように忠告する中国人の同僚の指摘に耳を貸さないような人でもあった、と伝えられているからだ。([20])

III. 娯楽に表れた日中交流

ここで挙げる娯楽とは、歌や映画である。　まずは歌について３曲を例として挙げる

が、１９３９年の一年間で歌に見られた変化に注目して欲しい。

『軍国横町』東辰三　作　（１９３９年）

何処もしがない暮しの所帯
吝（けち）な長屋の横町だけど
向う三軒御国の為に
揃って誉れの勇士を出した
これを名付けて軍国横町

かねて戦死は覚悟の倅
ならば斯うしてしてさっぱり垢を
落とした肌着で死なせてやりたい
話す健気な母さんに
みんなホロリと井戸端会議

鳶の三公の便りを読めば
敵の陣地へ一番乗りを
したときゃ日の丸纏（まとい）のように
立てて木遣りで鍛えた声の
万歳何度も唱えて候（そろ）

悪いと知ったらあっさり詫びて
後はカラリの男と男
泣いて喚いて加勢にすがる
隣のお国の蒋さんとやらに
見せて上げたい長屋の喧嘩

この歌は長屋に住む人たちの性格を表した歌だが、長屋に住む人たちは喧嘩をしてもすぐに仲直りができるさっぱりとした性格で、そういった性格を、負けたら泣いてでも日本軍に加勢しようとする蒋介石にも見せたい、といっている。日本人の性格を褒める一方で、蒋介石率いる中国とは、そういったいやな意味での執着心の強い性格だと、日本国民に訴えているようにも思える。

『チンライ節』　時雨音羽作　１９３９年

手品やるアル　みな来るヨロシ
うまくゆ**コ**ナラ　可愛がっておくれ
娘ナカナカ　きれいきれいアルヨ
　チンライ　チンライ　チンライ　チンライ　チンライ　ライ

刀なんぞは　不要（プヨプヨ）アルヨ
ケンクワ良くない　麦蒔くヨロシ
チャイナナカナカ　ひろいひろいアルヨ
　チンライ　チンライ　チンライ　チンライ　チンライ　ライ

手品うまいアル　良くみるヨロシ
娘きれいアル　見惚（と）れるヨロシ
うまくゆ**コ**ナラ　耳輪買ってオクレ
　チンライ　チンライ　チンライ　チンライ　チンライ　ライ

おそらく、これは中国人が日本語をしゃべり、日本人を誘っている場面であろう。この歌は、日本語の歌詞に中国語のイメージを付け加えているが、もちろん、実際中国人はこのような話し方はせず、日本人の中国語への勝手なイメージである。上の『軍国横町』の歌詞に比べたら、日本人と中国人の交流があり、若干友好的な歌詞だといえるかもしれない。しかし、言葉の使い方から考えるとおよそ友好的な歌とは言いがたい。

『別れの君が代』　佐藤惣之助作　１９３９年

暫く駐屯していたが
今日は別れだ　僕達は
新戦場へ　いでて行く
街よ民家よ　さようなら

日の丸かざして　皆来たか
支那の可愛い　子供たち
教えてあげた「君が代」を

ここで歌って　別れましょう

左様ナラニッポン　兵隊サン
ミンナオ礼ヲ　申シマス
オ馬モタンクモ　自動車モ
ミナサン万歳　バンバンザイ

あの子もこの子も　有難う
みんな達者でいておくれ
名残りが惜しいが泣くじゃない
馬が勇んで　待ってます

馬上はるかに見かえれば
雨になるのか　城壁も
寂しく遠く　暮れてゆく
街よさよなら　さようなら

上の歌は、日本の兵隊が暫く中国人の村に駐在していたところ、この村の人たちが親日になり、その兵隊が村を出て行くときに日の丸をかざして送り出してくれたという内容のものである。この日本人の兵隊も村人たちとの別れを寂しがっている。

最初の二つの歌は、中国を馬鹿にしたイメージを持つが、三曲目の『別れの君が代』を見る限り中国人は日本兵に親しく接し、日本兵も彼らにちゃんと答えている。たった一年間で、このような変化があることはとても驚きである。実際、１９３９年というのは、冒頭でも述べたように、日中関係に関する報道の歴史において、ひとつの転換期でもあったようだ。1 月には日支合作の記事が記載されていたり、5 月に満鉄調査部では『支那抗戦力調査』が始まっていたりするように、日本軍の苦戦が強いられるにつれ、日中友好的なものが増えている。差別的な記事を載せることは日本の国際的な立場がますます悪くなる、と政府が判断したからではないだろうか。中国に対して、高圧的な姿勢ではいられない、という譲歩が見え隠れする。

次に、日中交流映画を見ていく。

日中映画に登場する女優で有名なのは李香蘭である。彼女は、本名山口淑子といい、満州（現・中国東北）の炭鉱の町・撫順で生まれ、奉天（現在の遼寧省の省都・瀋陽市）と北平（現在の北京市）で育った国際的女優・歌手である。戦前には「李香蘭」の芸名で中国で活躍し、戦後は本名の「山口淑子」の名で日本で活躍した。（[21]）彼女の出演した１９４０年の映画『支那の夜』は大ヒットした。　主人公の「長谷」は、抗日感情を持った桂蘭（李香蘭）を助け、日本人嫌いの彼女を「指導」し、抗日感情の「治癒」に成功し、最後は結婚する、というストーリーである。（[22]）

下の資料は、彼女の１９４２年の出演作品である『蘇州の夜』が、今日ビデオ化しており、そのインターネット販売のイラストである。ストーリーの概要を見る限り、『支那の夜』とそれほどかわっていないようだ。（[23]）

蘇州の夜　ＳＢ－００９３

監督：野村浩将

原作：川口松太郎　脚本：斎藤良輔

出演：佐野周二／日守新一／李香蘭

概要

上海の細民街の医師加納は孤児院の保母、紅蘭と出会った。彼女は日本人嫌いだったが加納によって変わっていく。

１９４２年　Hi－Fi モノラル　モノクロ９８分

【税込価格】￥3,990

この時代、日本の植民地や占領地を描くときには、現地の人々は日本に友好的であるか、または無視するかのどちらかの姿勢をとらせるというのが敗戦までの日本映画の基本的な調子であったようだ。（[24]）しかし、この時代の国際恋愛ものの映画は、中国で「活躍する」日本人男性が　抗日の中国の女性と出会い、その女性の抗日精神を「治癒」してい

く過程で、お互いに惹かれあって結ばれるというものが多い。中国人が抗日心を持つのは日本人に対して誤った理解をしているためというのが、中国人に対するおきまりのステレオタイプで、それに対して日本人はそういった間違いを愛情を持って直すような心の広い人種である、と訴えているようにも思える。

これでは日中友好映画といいつつも、こういった映画では偏りがあり、偏りがある映画を見た人は真実を知ることができなくなる。これでは本当の友好とは言えないだろう。

おわりに

１９３７年の盧溝橋事件を契機として日中戦争が始まり、その戦火は１９４１年の太平洋戦争にまで飛び火し、結果、１９４５年８月に日本は敗戦した。　その間の日本の対中国への報道の仕方は、同じ戦時中でも異なることがわかった。　太平洋戦争前は、中国に対して悪いイメージを与える記事と、友好的な記事が並存し、太平洋戦争中は、中国に対して形式的にでも友好的な記事が登場したである。

一般的に、戦争を戦う相手国の人々に対して、ネガティブな印象を持つのはよくあることだ。　中国人も当然日本人に対して敵愾心を持っているはずだと考えれば、日本国民は兵隊とともに中国人を敵として闘う気分を持ちやすいし、そういう気分をあおるのが、メディアの役割ではないか。「鬼畜米英」という言葉があるように　パールハーバー襲撃以後日本人は　アメリカ人に対して憎しみを感じ、日本の中からアメリカ的なものを排除すると言う動きもあった。しかし、アメリカ人に対しては実は強い劣等感があり、憎悪はその裏返しの感情ではなかったか。

一方、中国人に対しては「鬼畜米英」に当たるような敵愾心をあおる表現は　日中戦争のさなかも　ついに表れなかった。敵対心どころか　さほどの憎しみも持っていなかったようだ。　いくら中国人を差別して見下していてもそれは憎しみではなかった。　もし

かしたら１９３１年頃には新聞の記事の書き方にも見られるように、中国に対する敵対心があったかもしれない。しかし、それ以降の記事を見る限り、差別は続いても憎しみは感じられない。

その背景の一つには、これまで見てきたような友好ムードを作り出そうとするメディアによるイメージ操作があったのではないだろうか。もちろん、この時代は政府による検閲があり、対中国感情操作は、政府の戦争施行政策の一つだったのだろう。そうした政府の政策に反するものは、映画も歌も新聞の記事も全て世に出ることはなかった。その検閲は、人々を戦争に賛同させ、戦争に反対する人を作らせないために政府にとって都合の良いものでなければならなかったのである。中国での戦争とは、中国人と日本人との友好のためであり、中国人は日本人を憎んでおらず、もし嫌っていれば、それは彼等の誤解であり、その誤解を直してやり、日本人を好きになるようにしてやるのだ　―　これが、メディアの伝えた日中戦争下の「日中友好の姿」であった。　「憎しみ」だけでなく、「友好」のテーマも　戦争を正当化しえたのだ。

戦争中の交流はあくまで建前の交流であった。朝日新聞が取り上げた、戦争中に日中交流を支えた人たちの中には、本当に友好を目的に接していた人もいたかもしれない。しかし、当時、本当の意味で日中相互理解と友好を実らせるために活動していた内山完造、尾崎秀実、鹿地亘、長谷川テル、といった人々の活動の実態を　当時の日本人は全く知らされていなかった。　それは彼らが日本の戦争自体に反対していたからだ。

内山完造は　上海で「内山書店」と言う本屋を開き、そこで多くの中国人と関わりを持った。　内山は　内山書店の客であった魯迅と関わりを持つようになり、魯迅や魯迅の実弟が戦争に巻き込まれた時は、彼らの身の安全のために働いた。　彼は一時日本に帰国し、求めに応じて各地で講演を行い、当時の日本人の中国観をやんわりと批判している。(２５)

尾崎秀実は　父親が台湾で役人をしていたため、小さい頃から台湾のような植民地

の現状をどうにかしたいという思いから反植民地主義者となった。　そして、朝日新聞社の記者として中国の状況を報道し、中国を決して甘く見てはいけないと読者に伝えた。彼はソ連の赤軍スパイであったリヒャルト・ゾルゲと出会い、「打倒植民地・資本主義」という共通の信念に基づき彼に接近し、後には近衛内閣のブレーンと言う立場を利用して、日本政府の情報をゾルゲに渡した罪で死刑になった。　尾崎は自分の命を賭けても日本の中国侵略を止めようとしたのだ。([26])

鹿地亘は共産主義者で、上海へ脱走した後、中国国内で脱走日本軍人を集めて日本人兵士反戦同盟を作った。　さらに中国で戦争している日本兵相手にビラや放送で戦争の無意味さを訴えた。([27]) 長谷川テルは　若い頃からエスペラント活動をし、満州国からの留学生でありエスペランチストでもあった劉仁と恋愛し、日中関係が緊迫する中、もう日本には帰れないという覚悟で彼を追って上海に渡った。そして、日中間の戦闘が始まり二人の生活は苦しくなる中で、「愛と憎しみと」という文章を書き、両国人民のために終戦を求め、日本の家族を懐かしみ、日本の敵は中国ではないことを訴えた。([28])

彼らは実際に中国や植民地の生活の中で暮らし、植民地主義に触れたり現地の人々と関わったり、中国の現状に触れたりすることによって戦争の無意味さ、植民地主義や資本主義への疑問を持つようになった。　しかし、彼らのように本当に中国人と交流して、共通の価値観を育成していった日本人たちの存在は、当時の日本人に知らされることはなかった。　なぜなら彼らは日本政府の対中国政策を批判し、反植民地主義者として活動していたので、政府は当然彼らの言動を快く思わず、彼らの多くを検挙したり、逮捕したりしたからだ。

当時の日本の新聞には、戦争中にもかかわらず、「日中交流友好」についてさまざまなことが書き立てられた。しかし、新聞に表れる「交流」とは建前の上での交流であり、本当の交流とは言いがたい。しかし、情報の受け手としては、間違ったステレオタ

イプなどの情報しか与えられていなければ、その情報を信じるしかなく、その結果、人々は日中戦争の悲惨さや実態を知る機会を失ってしまった。　メディアは常に公平性を持っていなければならず、より確かな情報を広めることが大事である。　今日「日中友好」の意味を考える際に　どういうことから始めたらよいだろうか。　日中戦争当時本当の交流を行おうとして、政府に邪魔されたり、一般の人々から無視されてしまった人々の存在を、掘り起こして知っていくことではないだろうか。

＊[1] このレポートでは、あえて「シナ」という差別用語をもちいる。その理由は、このレポートは戦時中の日本人がどう中国人を理解していたかということに注目するからである。

[2] 小林英夫『満鉄調査部』(平凡社出版　2005 年)、p. 142。

[3] 東京朝日新聞縮刷版　『悠長な支那農民』1938 年 12 月 21 日、p. 3。

[4] 同上　『日本名の支那娘　支那人はお嫌い』1938 年 12 月 6 日、p.2。

[5] 同上　『長江に鳴る女丈夫』1939 年 1 月 7 日、p. 11。

[6] 同上　『支那の旅から』1939 年 11 日 5 日、p.3。

[7] 同上　『日支協力の春（5）』1941 年 1 月 6 日、p.3。

[8] 同上　『日支協力の春（7）』1941 年 1 月 8 日、p. 7。

[9] 同上　『親友加代子さん』1941 年 1 月 1 日、p. 4。

[10] 同上　『たのしい日本語の勉強』1941 年 1 月 8 日、p.4。

[11] 同上　『前進する中国女性』1941 年 1 月 11 日、p.4。

[12] 同上　『私の日本語』1941 年 1 月 14 日、p. 4。

[13] 同上　『心の扉もはづして沸るアジアの血』1945 年 4 月 24 日、p.2。

[14] 同上　橋本増吉『アジア民族は一つ』1945 年 8 月 14 日、p. 2。

[15] http://www2.ttcn.ne.jp/~heikiseikatsu/seikatsu/UTAHON.htm（2007 年 2 月 6 日閲覧)。

[16] 東京朝日新聞縮刷版　『日満支カメラ・コンクール』1939 年 11 月 1 日、p. 7。

[17] 同上　『支那人の心を掴む』1939 年 11 月 5 日、p.1。

[18] 同上　『支那現代文講座』1941 年 1 月 9 日、p.1。

[19] 同上　『中日文化交流の回顧と前望』1941 年 1 月 9 日、p.3。

[20] 藤井省三『東京外語支那語学部―交流と侵略の間で』（朝日選書　1992 年）を参照。なおこのエピソードは、ゼミ生小島尚子氏のゼミにおける発表で取り上げられた。

[21] http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%8E%E9%A6%99%E8%98%AD　（2007 年 2 月 7 日閲覧）。

[22] 佐藤忠男『日本映画史２』（岩波書店　1995 年）p.76。

[23] http://www.shochiku.co.jp/video/v40s/sb0093.html　（2007 年 2 月 6 日閲覧）。

[24] 『日本映画史２』p.78。

[25] 丸山昇『上海物語』（講談社 2004 年）pp.188―189。

[26] 尾崎秀樹『ゾルゲ事件：尾崎秀実の理想と挫折』（中央公論社、１９８３）を参照。なおこのエピソードは、ゼミ生今泉博恵氏のゼミにおける発表で取り上げられた。

[27] 『上海物語』pp. 218－221。

[28] 『上海物語』pp. 221―227。